九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

名目的定義と部分的定義 : アリストテレス『分析論後書』における探求論

酒井, 健太朗
九州大学大学院 : 博士課程 : 哲学

https://doi.org/10.15017/1445828

出版情報：哲学論文集. 49, pp.19-35, 2013-09-29. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

名目的定義と部分的定義

――アリストテレス『分析論後書』における探求論――

酒井　健太朗

はじめに

哲学史的な常識において、われわれが何かを定義する際に、定義される対象が事物や本質であれば、その定義は「実在的定義（real definition）」と呼ばれる。対照的に、定義される対象が名の場合には、その定義は「名目的定義（nominal definition）」と呼ばれる。[1] この区別はアリストテレスに由来するものと一般的に考えられており、それは、アリストテレス自身が「実在的定義」と「名目的定義」という言葉を使っていないということを別にすれば、概ね正しいものだと思われる。ただし、この両者の定義の内実（定義の定義）はかなり不明瞭である。実在的定義については、アリストテレス存在論の主役の一つが本質概念だということもあり、『形而上学』の解釈を中心として、従来多くのすぐれた研究がなされてきた。その一方で、名目的定義については諸研究者の共通理解が成り立っているかすらあやしい。[2] 本稿は、名目的定義についてのそのような閉塞した状況を打開し、アリストテレスの探求論のうちにその正しい位置づけを行うことを目的とする。

本稿の構成は以下のようなものである。まず第一節では、『分析論後書』（以下『後書』）のうちで名目的定義が含まれていると考えられているテクストを参照しつつ、名目的定義を意味表示としての定義という観点から明らかにする。ここでは、架空的対象に適用されるN1と、数学的対象に適用されるN2の、二つの名目的定義の用法が明らかとなる。次に第二節では、真正な定義の予備的段階として捉えられる「部分的定義」が、先行研究では主に名目的定義と考えられてきたこと、その部分的定義と探求論との関係について明らかにする。そして第三節では、第一節におけるN2に特に着目することにより、意味表示と存在がいかなる関係にあるかが考察される。部分的定義だけではなくN2もまた『後書』の探求論のうちに正しく位置づけられることが明らかとなる。

1　意味表示としての「名目的定義」

名目的定義は基本的に「名（ὄνομα）」にかかわるため、名目的定義について考察する際には、この言葉が出てくるテクストが重要である。『後書』のうちでも特にB巻において、そのようなテクストは多く見うけられる。それらの中でもまずは、B巻第10章の次のテクストを引用することが必要である。

T1　（a）定義は「何であるか」[3]についての説明方式（λόγος τοῦ τί ἐστι）であると言われているので、（b）或る定義は、名や、あるいは名のような他の説明方式（λόγος ἕτερος ὀνοματοειδής）が何を意味表示している（σημαίνει）かについての説明方式であることは明らかであり、（c）たとえばこれは「三角形（τρίγωνον）」[4]とは何を意味表示しているかについての説明方式である。（B10, 93b29-32）[5]

B巻第10章はB巻における定義論の一つのまとめと考えられており、定義について考察する際に無視することのできないテクストである。そのB巻第10章の中でも、このT1はまさに、名目的定義と解されてきた定義についての重要な言明を含んだものである。このうちの（b）こそ、第一に名目的定義と考えられてきたものであり、名目的定義が名についての定義であるという考えはここに由来する。[6] この（b）を、ひとまず「意味表示」にかかわるものとし、その用法を探ることにしよう。その際に重要となるのは次のテクストである。

T2　あらぬものについては、それが「何であるか」を誰も知ることはない。私が「トラゲラポス［山羊鹿］」と言うときには、それの説明や名が何を意味表示するかを［人は］知ってはいるが、しかし「トラゲラポスとは何であるか」を知ることは不可能である。（B7, 92b5-8）

われわれは、「トラゲラポス」のような架空的対象の名についても、その意味内容について知ることは可能である。たとえば、神話や物語に登場する「トラゲラポス」は「半分山羊で半分鹿」のような意味内容を持っているだろう。しかし、このような架空的対象は存在しないため、その存在や本質を知ることはできない。T2から学べることは、意味表示と存在、そして「何であるか」が何らかの形で関係していると、アリストテレスが考えていることである。

（b）は架空的対象の名にも適用される意味表示の用法であるが、T1においては、（c）で「三角形」という数学的対象の名が「意味表示する」と言われていた。名目的定義が名の意味表示の定義であるのならば、この事態についても検討を行う必要がある。数学的対象の名と意味表示についてのテクストは以下のようなものがある。

T3　「『三角形』が何を意味表示しているか（τί ... σημαίνει τὸ τρίγωνον）」は、幾何学者が受け入れたことであるが、「三角

形があるということ（ὅτι… ἔστι）」は、証明すること（δείκνυσιν）だからである。（B7, 92b15-16）

アリストテレスの考える幾何学者は、幾何学的対象（より広くとれば数学的対象）の意味表示を最初に受け入れ、それが存在することを後に証明する。ここでもまた、意味表示と存在との問題が登場している。

以上の考察から次のことが明らかである。名目的定義とは第一に意味表示にかかわる定義であり、それはT1の（b）において示されていた。この意味表示の具体例は、T2とT3において示されている。T2においては架空的対象が、T3においては数学的対象が意味表示の具体例である。意味表示が架空的対象についてある場合には、われわれはその架空的対象の存在や本質にコミットすることは不可能である。これに対して、意味表示が数学的対象についてある場合には、数学的対象の存在を後に証明することができる。

意味表示として捉えられる名目的定義の中には、少なくとも二つの異なる用法が存在する。本稿ではこれ以降、T2における意味表示をN1、T3における意味表示をN2と記述することにする。次節では、T1の中で残されていた（a）とそれにまつわる問題を見ていくことにする。

2 「何であるか」と部分的定義

アリストテレスの名目的定義についての研究が行われる際、諸研究者が主に関心を持つのは、T1（a）から出てくる、「名目的定義」と「何であるか（本質）」との関係である。本節ではこの両者の関係について、先行研究をもとに明らかにする。

たとえばDemoss and Devereuxは、アリストテレスにおける名目的定義は本質に何らかの形で関係しているものだと述べる。[7] なぜならば、T1において、（a）定義は「何であるか」の説明方式であると述べられた後に、（b）定義の一つが意味表

示するものであると述べられているからである。では、Demoss and Devereux の考える名目的定義は本質とどのように関係しているのか。そこで彼らは以下のテクストを参照する。

T4　ところで、われわれは「あること」を或る時には付帯的に（κατὰ συμβεβηκός）把握しているが、しかし他の時には「その事物そのものの何か」を把握することによって（ἔχοντές τι αὐτοῦ τοῦ πράγματος）把握している。たとえば、雷鳴を「雲間における或る音響」、月蝕を「光の或る欠如」、人間を「或る動物」、そして魂を「自ら自身を動かすもの」と把握するような場合である。（B8, 93a21-24）

本質の一部を指す「その事物そのものの何か」を、Demoss and Devereux はまさに「名目的定義」と呼ぶ[8]。たとえば、月蝕の「何であるか」は「地球の介在による月からの光の欠如」である（B2, 90a15-16）。「光の或る欠如」はこの定義の中に含まれる形で、月蝕の本質に関係している。このような名目的定義によって本質の一部を把握した後に、月蝕の場合には「地球の介在」のような根拠（原因）の把握に向かうというのが、Demoss and Devereux による探求の図式である。

Demoss and Devereux のように名目的定義の問題を考察する際にT4を重視するという方針は、多くの人々に共有されているものである。たとえば Ackrill は、‘full definition’ないし‘complete definition’と、定義されるべき当の事象の原因（中項）を加えることによって full definition となるところの‘partial definition’とを対比させている。この場合、「雷鳴とは、雲間において火の消滅することによる音響である」という本質を表す定義が full definition であり、「雷鳴とは雲間における或る音響である」という本質の一部を表す定義が partial definition である[9]。本質の一部を指す定義は、Ackrill 以外にも Sorabji や Modrak によって「部分的定義（partial definition）」と呼ばれている[10]。諸研究者は、いわゆる「名目的定義」を部分的定義として捉えているのである。本稿でもこれに従い、本質の一部を指す定義について述べる際には、これ以降「部分的定義」という名称

を用いることにする。

では、この部分的定義を用いることによって、自然事象はいかなる形で探求されていくのか。本節の残りではこのことについて論じる必要がある。

先に、月蝕について「光の或る欠如」を、雷鳴について「雲間における或る音響」を把握するという事態は、本質の一部を把握していることだと述べた。アリストテレス探求論のポイントは、このような部分的定義が、本質の一部を把握するだけでなく、存在を不完全な仕方であれ把握していることを示すところにある。そのことの根拠は以下のテクストのうちに求められる。

T5 「何であるか」を探求するということは、「それがある」ということを把握することなしには、何ものをも探求してないということである。しかし、「その事物そのものの何か」を把握しているのであれば、それ［「何であるか」の探求］はより容易なことである。結果として、「あること」を把握していさえすれば、その程度まで「何であるか」に関してさえもわれわれは把握しているのである。（B8, 93a26-29）

「その事物そのものの何か」とは部分的定義のことであった。そうすると、この箇所では、部分的定義の把握と存在の把握がパラレルに語られていることになる。このことは、事実と根拠を同時に知るのでなければ根拠を知ることにはならないと述べられている（B8, 93a35-37）ことからも明らかである。ここでの「事実」とは、たとえば月蝕の場合には、「光の欠如が月に属する」ということである。この「事実」は、以下の定式化からも明らかなように、月蝕の本質論証の結論でもある。[11]

【月蝕の例】
光の欠如が地球の介在に属する。
地球の介在が月に属する。
―――――
光の欠如が月に属する。

ここで注意されるべきは、この論証における事実＝結論が、単にそれを見ることによって把握された「光の欠如が月に属する」とは異なるということである。というのも、論証の結論に位置する事実は、その根拠の把握を通じて獲得されたものだからである。

つまり、アリストテレス探求論の持つ構造は次のようなものなのである。まず、われわれは目で見ることによって、月蝕がまさに生じているという事実を把握する。この事実把握は、「何ゆえに」の欠けている、根拠のない事実把握であるが、「その事物そのものの何か」＝部分的定義としての「光の欠如」は把握されている。その後に、光の欠如が月に属する原因を探求することによって、月蝕の「何ゆえに」をわれわれは知る。その原因を含んだ形で論証を構成することによって、月蝕の真正な定義である「［月と太陽の間の］地球の介在による光の欠如」（B2, 90a15-16）が論証全体から示される（B8, 93b16-18）。そしてそれと同時に、根拠＝中項を通じた事実＝結論があらためて把握されるのである。

以上から、われわれが部分的定義を把握する時には、存在を不完全な仕方で（根拠なしの事実として）把握していると言うことができる。不完全な仕方であれ存在が事実として把握されているからこそ、その事実の根拠を探求するという形で探求が進んでいくのである。そしてこの根拠を探求していく過程において、存在の把握もまた進行する。最終的に、根拠ない

し本質が論証において示されたとき、われわれの存在把握もまた完全なものとなるのである。つまり、部分的定義とは「特定の学における存在証明の前段階として機能する定義」なのである。

本節で明らかになったことは、探求における自然事象の存在把握は、本質把握と並行して行われるものだということである。ここで重要な点は、探求対象であるところの月蝕や雷鳴のような事象の存在をアリストテレスが疑っていないということである。事象の存在は、探求の端初においてすでに事実として受け入れられている。それでもアリストテレスが事象の存在を「証明する」と述べるのは、学の対象としての事象の存在把握が、その根拠と本質を度外視した形ではありえないからである。

さて、以上の考察からも理解されるように、知識探求に対するアリストテレスの基本的な姿勢は、部分的定義において最もよくあらわれている。このように部分的定義は探求論に不可欠なものであるが、部分的定義と意味表示としての名目的定義は異なるものであると思われる。次節では、意味表示としての名目的定義について、特にN2に着目しつつ論じることにする。

3　意味表示と存在

第二節における部分的定義と異なり、先行研究において、N1やN2のような意味表示としての名目的定義が着目されることはほとんどなかった。前節で参照したDemoss and Devereux[12]も、定義論についての本格的な研究書を書いたDeslauriers[13]も、本稿における意味表示の問題について触れるだけであり、本格的な考察をおこなっていない。しかし、第一節から明らかなように、アリストテレスにおける名目的定義は、第一に意味表示としての名目的定義である。そうすると、名目的定義の考察は、意味表示についての考察がなければ不完全なものとなる。

N1については、その対象が架空的対象であるため、存在にコミットしないと言うことができる。しかし、存在にコミットしないからといって、N1がまったく役に立たないものだというわけではない。むしろN1は、非存在さえも対象とできる定義であると積極的に捉えることが可能である。この解釈は、「トラゲラポス」という架空的対象の名が「トラゲラポスは神話上の生物である」という命題が真であるために必要であるということから補強される。N1は、『後書』における論証的知識の探求の問題に直結するものではないが、われわれ自身の言語使用の問題について考えるとき、十分に意義あるものとなる。[14]

N1に反して、N2は論証的知識の問題を考察する際に必要不可欠なものである。N2の理解のためには、B巻だけでなくA巻をも考察の範囲に含める必要がある。まずは、N2の意味表示が何を意味表示するのかを探らなければならない。T3では、N2の対象として「三角形（τρίγωνον）」という例が挙げられていた。τρίγωνον という言葉は、『分析論』において、「内角の和が二直角である（2R）」という属性の基体としてしばしば登場する。[15] 本節ではまず、『後書』やその他のテクストで τρίγωνον という言葉の出てくる箇所を詳細に検討することによって、τρίγωνον の基体以外の用法を明らかにする。この問題を考察することで、N2の意味表示の内実も自然と明らかになる。

この目的のためには、A巻第一章における次のテクストが重要となる。

T6 「あらかじめ知らなければならない」ということには二通りの意味がある。或るものについては「それがある」ということをあらかじめ認めなければならず、或るものについては「述べられているものが何であるか（τί τὸ λεγόμενόν ἐστι）」[16]を把握していなければならない。[……]「三角形」については、「それがこのことを意味表示する」ということ（ὅτι τοδὶ σημαίνει）を、「一つ（μονάδα）」については、「それが何を意味表示するのか」ということと「それがある」ということを把握していなければならない。というのも、これらのそれぞれはわれわれに同じように明らかではないからである。

（A1, 71a11-17）

ここでは、「三角形」と「一つ」という二つの例が挙げられており、それらが区別されている。「三角形」はT3と同じようにその意味内容を把握するべきものの例として挙げられ、対照的に「一つ」は、意味内容と「それがある」ということの両方を把握していなければならない例として挙げられている。数学的対象に対するアリストテレスのこの態度は、A巻第10章においてもほとんど同じ形で見つけることができる（A10, 7a32-36）。ここから理解されることは、「一つ」はその存在が先に措定されるのであるが、「三角形」はその存在が証明されなければならないということである。数学的対象のうちには、存在の証明を要するものと要しないものがあり、「三角形」はそのうちの前者にあたる。

さて、T3において「『三角形』があるということ（ὅτι… ἔστι）は、証明すること」と述べられていた。このような、「三角形」の存在を証明するとはいかなる事態を示すのであろうか。これについて考察することで本節、ひいては本稿の結論としたい。

数学的対象が論証的知識の対象となる際、意味表示とはあくまで名についてのものであるので、まず「『三角形』とは三つの線分に囲まれた平面図形である」（エウクレイデス『原論』第一巻定義19）[17]というような形で、「三角形」という名についての定義（N2）をわれわれは仮定する。[18] この仮定が必要であるのは、アリストテレスにとって、数学的諸学は、「先立つ認識（γνῶσις）」から獲得されるからである（cf. A1, 71a1-4）。三角形がいかなるものかをまったく把握していない状態では、三角形の存在を証明することなど不可能である。また、三角形についてのN2がこのような形になるのは、線や点といった数学的対象はアリストテレスにとって三角形よりも根本的なものであり、[19] 三角形の「何であるか」のうちには線が含まれるとA巻第4章で明言されているからである（A4, 73a34-35）。さらに、『カテゴリー論』において、三角形は形の一種であるということも言われているので（*Cat.* 10a11-16）[20]、「三角形」の定義自体に関しては、アリストテレスはエウクレイデスと同じような定義「三角形とは三つの線分にかこまれた図形である」を持っていたと推測することは不可能ではないだろう。[21]

「三角形」の定義については以上のような理解を行うとして、問題は、「三角形」の存在の証明であった。ここでわれわれ

は、前節における探求論の考察を思い起こす必要がある。探求論の枠組みでは、論証は根拠を通して行われなければならない。しかし、自然事象の場合と異なり、数学的対象の場合には名を仮定するだけなのであるから、根拠の把握は著しく困難である（B10, 93b32-35）。「三角形」の存在の証明を明らかにするためには、この根拠の問題が重要なものとなることが予測される。

ここでわれわれが提出する解釈は、実際の作図による構成を根拠の代わりとするものである。[22] この解釈には一定の妥当性がある。というのも、われわれは実際に作図することによって、「『三角形』とは三つの線分に囲まれた平面図形である」という定義が、まさに正しいものであることを知ることができるからである。この手続きが終わった後には、もはや先の定義は名の意味表示についての単なる仮定ではなく、「三角形とは三つの線分に囲まれた平面図形である」という真正な定義になる。

ところで、学的探求論の枠組みでは、真正な定義を把握した時に、存在もまた正しく把握されるのであった。数学とはアリストテレスにとって学の一つであり、探求論のテクストのうちで数学（的対象）についてアリストテレスは何度も言及を行う。[23] そうであるなら、数学的対象もまた、真正な定義が示されるときに存在が把握される必要があるのではないだろうか。「三角形とは三つの線分にかこまれた図形である」というような定義が確立されてはじめて、われわれは三角形という数学的対象が存在するということを知るのである。つまり、「三角形」があるということを証明するということは、実際の作図によって真正な定義を獲得するのと同時に存在が把握されるということなのである。

以上の考察から、「三角形」のような幾何学的対象には名目的定義がまず必要であること、そして、その存在の証明は実際の作図を根拠とすることによって定義が把握されると同時に遂行されることが明らかとなった。数学的対象の存在の証明についてのこのような理解は、部分的定義の考察なしにはありえないが、しかしそれのみからは出てこないものである。

N2が先行研究において十分に取り扱われてこなかったという事情は、「三角形」の存在の証明の具体例が『後書』のうちに

見つけられないことに起因すると思われる。しかし、探求論の観点を導入することによって、その証明をわれわれ自身で再構成することが可能となるのである。

N1もN2も、その対象は存在をそのままで認めることのできないものである。架空的対象は存在しないが、その名の意味内容を述べることはできる。数学的対象は、存在を後に証明しなければならず、そのために先立つ認識として、名の意味内容を了解しておく必要がある。このことは、「一つ」のような存在が措定される数学的対象ではなく、「三角形」のような数学的対象においては、存在の証明のための手がかりとして名の意味内容が必要となるということである。意味表示としての名目的定義を考察することは、アリストテレスが通常主題としない存在者についての理解を深めることにも繋がるのである。[24]

おわりに

本稿における議論で触れることのできなかった問題は数多くあるが、その中でもっとも重要な議論は次のものである。それは、N2の対象である「三角形」を、論証的学の対象の一つであるところの「自体的属性」として解する議論である。この解釈は、諸研究者のうちでも、特にGoldinによって強固に主張されている。[25] しかし、「三角形」の定義や存在の証明の具体例が『後書』のうちに見つけられないのと同じように、「三角形」が自体的属性であると明確に示したテクストは『後書』にない。本稿ではこの問題の検討を避けてきたが、『後書』を全体として明らかにするという目的を持つのであれば、これはいずれ扱わざるをえない問題である。

また、本稿における名目的定義についての考察は、『後書』の最重要の問題であるB巻第19章における「第一原理」の問題をもその射程に含むものである。[26] 名目的定義も第一原理も、学的知識の探求の出発点（ἀρχή）として機能する。この二つを即座に同定することは早計に過ぎるとしても、本稿で獲得された名目的定義についての知見は、第一原理の問題を解決する

ための新たな糸口となることが期待される。この点についてもまた、今後の課題とすることにしたい。

参考文献

Ackrill, John L. (1963). *Aristotele's Categories and De Interpretatione, Translated with a Notes and Glossary,* Oxford, Oxford University Press.

Oxford.

———, (1981). ‘ Aristotle's Theory of Definition: Some Questions on Posterior Analytics II 8-10’, in Berti, Enrico, *Aristotle on Science: The Posterior Analytics*, Pauda, Antenore, pp. 359-384.

Barnes, Jonathan (1993). *Aristotle's Posterior Analytics, Translated with a Commentary*, 2nd ed., Oxford, Oxford University Press.

Bolton, Robert (1976). ‘Essentialism and Semantic theory in Aristotle: *Posterior Analytics*, II, 7-10’, *The Philosophical Review* 85, no. 4, pp. 514-544.

Bonitz, Hermann (1870). *Index Aristotelicus,* Berlin.

Charles, David (2000). *Aristotle on Meaning and Essence*, Oxford, Oxford University Press.

———, ed. (2010). *Definition in Greek Philosophy,* Oxford, Oxford University Press.

Demoss, David and Devereux, Daniel (1988) ‘Essence, Existence, and Nominal Definition in Aristotle's *Posterior Analytics* II 8-10’, *Phronesis* 33, no. 2, pp. 136-152.

Goldin, Owen (1996). *Explaining an Eclipse: Aristotle's Posterior Analytics 2.1-10*, The University of Michigan Press.

Heath, Thomas (1949). *Mathematics in Aristotle,* Oxford, Oxford University Press.

加藤信朗訳註（1971）.『分析論後書』、アリストテレス全集第一巻、東京、岩波書店。

Liddle, Henry George, Scott, Robert, and Jones, Henry Stuart (1996).*A Greek-English Lexicon,* Oxford, Oxford University Press.

McKirahan, Richard, D. (1992). *Principles and Proofs: Aristotle's Theory of Demonstrative Science*, Princeton, Princeton University Press.

Minio-Paluello, L. (1949). *Aristotelis Categoriae et Liber De Interpretatione,* Oxford, Oxford University Press.

Modrak, Deborah (2001). *Aristotle's Theory of Language and Meaning*, Cambridge, Cambridge University Press.
———, (2010). 'Nominal Definition in Aristotle', in Charles, pp. 252-285.
中村幸四郎、寺阪英孝、伊東俊太郎、池田美恵訳・解説（2011）.『ユークリッド原論追補版』、東京、共立出版。
Robinson, Richard (1950). *Definition*, Oxford, Oxford University Press.
Ross, W. D. (1949). *Aristotle's Prior and Posterior Analytics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford, Oxford University Press.
———, and Minio-Paluello, L. (1964). *Aristotelis Analytica Priora et Posteriora*, Oxford, Oxford University Press.
Sorabji, Richard (1981). 'Definitions: Why Necessary and in What Way?', in Berti, Enrico, *Aristotle on Science: The Posterior Analytics*, Pauda, Antenore, pp. 205-244.
Tredennick, Hugh and Forster, E. S. (1960). *Aristotle Posterior Analyatics; Topica*, Harvard University Press.

註

（1）実在的定義と名目的定義のこの規定については、たとえばRobinson（1950: 16）を参照。

（2）アリストテレスの「名目的定義」についての研究としてよく挙げられるのは、Bolton（1976）とDemoss and Devereux（1988）の二つの論文である。また、最近の論文としてModrak（2010）もある。本稿では、特にDemoss and Devereuxによるものを第二節において参照した。

（3）以下では、「何であるか（τί ἐστι）」と「本質（τὸ τί ἦν εἶναι）」の二つの言葉をほとんど区別なく用いることにする。

（4）ひとまず「三角形」と訳した。この言葉の詳しい考察については、本稿第三節を参照。

（5）引用について、『後書』に関しては巻、章、ベッカー版のページ数を、その他の著作を参照する場合には著作名も含めて指示することにし、訳の底本としてOCT版を用いる。なお、この箇所の記号による補足については、（　）は原語を、［　］は筆者による補足ないし説明を示す。以下同様。

（6）LSJの ὀνοματωδής の項を参照。

（7）Demoss and Devereux（1988: 136-152）.

（8）B巻第10章には、事物の付帯的な把握からは「何であるか」について探求を行うことは困難であり、「その困難の原因は以前に述べられていた」（B10, 93b33-34）という言明がある。この「以前に（πρότερον）」の指示する箇所は諸研究者によって、B巻第8章における「その事物そのものの何か」に言及している箇所であると考えられている（Ross（1949: 636）, Barnes（1993: 223））。このことから、B巻第10章における名目的定義と、付帯的把握ではない「その事物そのものの何か」が同定されるという解釈が生まれるのである。また、Modrak（2010: 257）は、B巻第7章で扱われた定義と論証についての難問の解決法がB巻第8章で提示されているという理由から、「その事物そのものの何か」を名目的定義の具体例と考えている。しかし、これらの解釈はT1に登場する「三角形」の意味表示の例についての説明を与えない。本稿註12を参照。

（9）Cf. Ackrill（1981: 361, 373-37）.

（10）Cf. Sorabji（1981: 215）, Modrak（2010: 257）. また、Deslauriers（2007: 79）も参照。

（11）この定式化はB8, 93a30-33から獲得される。

（12）Cf. Demoss and Devereux（1988: 136-137）. 意味表示としての名目的定義に関する彼らの解釈は以下のようなものである。名目的定義の対象には二つの種類があり、そのうちの一つは論証を通して示すことが可能であるが、他方はただ仮定されたり措定されたりするだけである。名目的定義は論証の結論として論証される対象に与えられるべきであるが、三角形のような仮定ないし措定される対象にも名目的定義は与えられてよい。ibid., p.134, n.2にも見られるように、Demoss and Devereuxは明らかに、「名が何を意味表示するのか」としての名目的定義（特にN2）をB巻における異分子として捉えているように思われる。彼らがこの論文で、意味表示としての名目的定義にとって重要なテクストであるB巻第7章を取り上げない理由はおそらくはそこにある。

（13）Cf. Deslauriers,（2007: 71-72）. 名目的定義についてのDeslauriersの結論は、彼女の言うところの無中項定義（immediate definition）の前段階として、類を把握するものとして名目的定義を解釈するというものである。

（14）Modrak（2001: 47-48）.

（15）Cf. Bonitz（1870: 770）

（16）Charles（2000: 27, n. 9）によれば、ここでの「述べられているもの（τὸ λεγόμενον）」は「三角形（τὸ τρίγωνον）」と同格であり、

signifierであるがゆえに、対象ではなく項でなければならない。Goldin（1996: 44）はこの τί τὸ λεγόμενόν ἐστι という表現は曖昧であると述べる。つまり、Charlesのような解釈がありうる一方で、LSJに従えば、この表現は言明の基体として措定されるものを指示することもできき、その場合にはここで問われていることは「何であるか」すなわち本質であることになるという解釈も同時に示しているというのである。McKirahan（1992: 48）はCharlesと同じ解釈をしているように思われる。ここではCharlesやMcKirahanの解釈に従った。

（17）エウクレイデス『原論』の訳については、中村 et al. によるものを使用した。

（18）「『三角形』とは三つの線分に囲まれた平面図形である」という仮定はアリストテレス自身によるものではない。しかし、これ以降の本段落で述べられる理由から、このような仮定を行うことは不可能ではないと思われる。また、Goldin（1996: 51, n. 20）を参照。

（19）「点」や「線」を「三角形」の（fundamental or primitive）subjectと捉える解釈は、Ross（1949: 505, 539）, Tredennick（1960: 197）, McKirahan（1992: 38, 40-41, 48-49）, Goldin（1996: 48-51）等にある。なお、この中でも特にTredennickは、71a14や76a35、そして93b31を参照箇所として挙げている。

（20）なお、Ackrill（1963: 167）はこの箇所の解釈として、「三角形」や「四角形」は「幾何学的な線や表面の性質を指し示す」と述べている。これは、「三角形」を属性として捉える解釈への一つの補強となるかもしれない。本稿の「おわりに」を参照。

（21）もちろんこの議論には、アリストテレスとエウクレイデスの数学的対象についての考え方の違いがまた別の問題として出てくる。この問題については今後の課題の一つとしたい。

（22）Heath（1949: 71-72）によれば、アリストテレスによる幾何学的対象の存在の証明は、この実際の作図によって行われる。この作図の具体例をアリストテレスは示していないが、たとえばわれわれは、『原論』の第一巻命題1のような具体例をすでに持っている。

（23）B巻第7章においてT3のような議論が行われていることはもちろんであるが、B巻第8章のような探求論の中核となる章においても、アリストテレスは三角形と2Rの問題のようなA巻においてよく見られる議論を展開している（B8, 93a33-36）。さらに、B巻第9章においても、「一つ（μονάδα）」の例が出ており、それに対する規定はT6とほとんど同じである（B9, 93b24-25）。

(24) アリストテレスにおける数学的対象についての考察は、『形而上学』M巻とN巻を抜きにしては十全なものとならない。本稿はあくまで『後書』のうちから読み取れる数学的対象についての議論を参照している。そして本稿における議論から示されるように、この手法は一定の成果をあげることに成功している。

(25) Cf. Goldin (1996: 48-51). また、McKirahan (1992: 49) は、「三角形」を「一つ」のような原初的な基体と異なる、派生的な基体と解している。この見解も注目に値するものである。

(26) 第一原理の問題については、日本哲学会第72回大会（於 お茶の水女子大学）において「『分析論後書』B巻第19章における第一原理の問題」という題目のもと発表を行った。

（本学大学院博士後期課程・哲学）